

園内研修初期段階における保育実践の変容とその諸相 — 特別に配慮を必要とする子どもへの注目を契機として —

入江礼子・内藤知美
太田佐恵子・井上紀子
水澤典子・三浦加奈子・杉崎友紀

THE CHANGE IN PRE-SCHOOL TEACHER'S ACTION DURING THE EARLY STAGE OF TRAINING — PAYING ATTENTION TO PRE-SCHOOLERS IN NEED OF A SPECIAL CARE AS A TURNING POINT —

IRIE Reiko・NAITO Tomomi
OHTA Saeko・INOUE Noriko・MIZUSAWA Noriko
MIURA Kanako・SUGIZAKI Yuki

The attention paid to pre-schoolers in need of special care during the early stage of our training program brought a light to the state of each pre-schooler, and also to the relationship between the pre-schooler and the teachers. During this process, 3 things became evident.

1. By having the teachers expect where each pre-schooler would play each day, the understanding towards each pre-schoolers deepened. It also helped the teachers see their relationships with the pre-schoolers more objectively.
2. Through the differences of attitudes towards the pre-schoolers, it became clear to the teachers that each of them had a different view on Early Childhood Care and Education and children.
3. Keeping a record of what happened each day and the reflection of it helps create a change in the action.

Keywords: teachers training program, pre-schoolers in need of special care, creating a change in the action

園内研修

特別に配慮を必要とする子ども

保育実践の変容

1. 研究の目的

鎌倉女子大学幼稚部（以下幼稚部）は1950年（昭和25年）に当時の京浜女子短期大学の附属幼稚園として設立されて以来51年の歴史を持つ。そ

の間、1957年（昭和32年）には短期大学部に初等教育科が設置され、また1964年（昭和39年）には大学家政学部に見童学科が設置された。それぞれ将来の幼児教育現場を担う保育者を輩出するとい

う目的を持って設置されたわけである。当初、短期大学の附属幼稚園として出発した幼稚部は、現在では鎌倉女子大学幼稚部として学校法人鎌倉女子大学（以下本学園）の併設校の一つとして位置づけられている。

2001年度（平成13年度）は本学園の方針として、より質の高い保育者を養成するために、併設の大学及び短期大学部と幼稚部の連携を密にすることが掲げられた。その具体的方策として大学教員2名が幼稚部兼任となった。幼稚部は従来、単発的に大学及び短期大学部の教員との連携はあったものの、それはあくまでも単発であり、継続性を持つものではなかった現状があつたことでもある。

幼稚園での園内研修に関する最近の先行研究には、お茶の水女子大学附属幼稚園での保育者間の話し合いの必要性を感じて始まった保育カンファレンスについての論文（田中ら1996ⁱ、田中ら2000ⁱⁱ）、青山学院幼稚園が外部の研究者をビデオ観察者として迎え、ビデオをもとに園内研修を行った過程のなかで浮かび上がってきた問題を取り上げた論文（長山ら2000ⁱⁱⁱ、岸井ら2000^{iv}）、さらに国立音楽大学付属幼稚園での保育の変革過程に関する論文（青木2000^v、青木2001^{vi}）等がある。いずれも長い歴史を持つ幼稚園であるが、これらの論文は各園の保育の見直しを迫られた過程から生まれたものである。結果として園内研修を行うことが保育実践上プラスに働くことが示された。しかし園内研修そのものを取り上げた研究は、それ自体が少なく、外部から園内研修に関わることの限界が指摘でき、「内部の力動性」について詳細に検討したものは現時点ではない。

本研究は、園内研修を内部の「当事者」の問題として取り上げ、保育者自身および保育者間の力動性を丁寧に掬いあげる研究であり、今回は特に園内研修の初期段階の実践の変容について検討した。

2. 研究の方法

2001年度4月当初、幼稚部で「遊びを中心とした保育を展開し、一人ひとりの育ちを理解した環境作りを行う」ために園内研修を行うこととした。

幼稚部での保育の現状はこれとは異なるものであったからであり（図1参照）、先行研究に鑑み、保育の変容を図るためには園内研修が有効であると考へた。

（図1）昨年までの一日の流れ

一日の流れ	
8:50	登園（9時までに着替えを済ます）
9:00	体操
9:10	クラスの時間 朝の挨拶、出席調べ、歌等 その後設定保育。担任が決めた保育内容をクラスごとに行う。
10:30	自由遊び 文字どおりの自由遊び。担任がこのために環境設定することは、ほとんどない。
12:00	お弁当 静かに遊ぶ時間
13:00	片付け、掃除 着替え
14:00	降園

○期間：2001年4月2日～10月15日（現在も継続中）

○方法：園内研修は原則として週1回行った。今回取り上げるのは初めの6ヶ月間に行った28回分である。メンバーは幼稚部の全保育者（部長、次長、クラス担任4名、主任、助手、フリー保育者（9月より））9名である。進行は主に部長か次長が務め、毎週担任から提出される週日案の検討を、主に担任を始めとする全メンバーがそのときどきで取り上げたいことを中心に話し合いを進めた。その内容は議事録をとるという形で記録として残した。また9月からはメンバー全員がその日の保育を省察することを目的にエピソードを「一日を振り返って」という保育後記録（400字～800字分）の形で書くということが加えられ、この内容も週日案と並んで園内研修で取り上げた。

本研究では各担任から出された週日案、園内研修議事録（記録者は輪番）、保育後記録「一日を振り返って」を資料として保育実践の変容の経過

とその意味について分析していく。

3. 園内研修の経過とその意味

(1) 園内研修以前 (4/2)

入園式前の新学期の準備期間中に行った職員会議で部長、次長は下記の2点を提案した。

1) 自分の保育だけではなく他の保育者の保育も見えるように担任が週日案及び各月の指導計画を作る。そしてそれをもとに週1回ペースの園内研修を行う。

2) 教育計画、年間の指導計画を作るためにはその基礎となる幼児理解が欠かせない。そこで幼児の実態が一番ストレートに出る、遊びを選択して活動する時間を今までより長くするために保育時間の一部見直しをする。

1) についてはその実施について問題はなかった。保育者が考え込んだのは2)の保育時間の見直しについてであった。主任を除く担任の保育者は幼稚部が初めての職場であり、他の保育現場の経験はない。今まで何の疑いもなく当たり前だったことを変更するには抵抗があると思われた。そこで、通常保育の日には今までの9時の体操が終わった後はすぐに各クラスの活動に入るという流れを、10時半前後までは子どもが遊びを選択して活動する時間とすることで様子を見ることとなった。不都合があればそのときに話し合うこと、特に年長クラスについては子どもたちが今までの1日の流れで既に2年間幼稚園生活を送っていることを考えて、より慎重に様子を見ることを確認し合った。

(2) 第1期 (4/9～4/26)

・報告に終始した話し合い

第1回 (4/9)～第5回 (4/18)

新学期の初めの1週目は保育後ほとんど毎日園内研修を行った。週日案の検討と共に、主に新入園児の理解に多くの時間が費やされた。各担任から報告というかたちでこの時期に名前が挙げられた29名のうち19名が新入園児である。そのうち3回以上にわたって名前が挙げられたのはI夫、H子、G子、Y夫、Z子の5名 (Z子以外は全員4歳児) である。いずれも担任などが特別に配慮を必要と

すると感じた子どもたちであった。うち2名、G子とZ子は障害を持っており、これは入園前から情報として入っていた。実際に保育をはじめた段階でも特別に配慮が必要と感じさせられる場面が多かったということになる。一方、残りの3人はまだ園生活に慣れないために泣いたり、一人集団から離れたら、言動がうまくつかめないと担任がとらえた子どもたちである。しかし担任がなぜその子どもたちに配慮が必要と思ったかという根拠、あるいはその子どもに自分がどんな思いを抱いているかということへの言及はなかった。

この時期は午前保育 (11時終了) であった。部長・次長からの提案で今まで9時の体操後すぐにクラスでの活動となっていた流れを午前保育の時でも10時近くまでを子どもが遊びを主体的に選択して活動する時間として位置づけるという試みを始めた。

(3) 第2期 (4/27～7/30)

・主任・担任からの発言の活発化と環境図の提案

第6回 (4/27)～第9回 (5/8)

新学期が始まって約20日経過した4月末から2時降園の通常保育となった。そのような状況のなか、特別な配慮が必要な子どもとしてG子、H子とI夫の名前が引き続き挙がり、他の2人に入れ替わる形でM夫とR夫の名前が挙げられた。M夫は4月中旬まで熱で休園していた4歳の新入園児である。担任からはG子とM夫に対しては子どもたちからの積極的な関わりを期待したいという発言があった。しかし現実には動きがゆっくりなM夫に対しては「どうしたんだろう？」と思う子どもやM夫が時々出す大きな声を聞いて「なんか変な子」という発言をする子ども、気にはなっているがどのように関わってよいか分からずに動けない子どもたちの姿があることが担任外の保育者からも出された。6回目には週日案を検討しながら今のままの書き方では、あまり個々の子どもの姿が読みとれないことが話合われた。そこで部長・次長から次週から週日案のなかの環境図^{vii}に子どもたちの名前を入れることで、その週に予想される子どもの動きを押さえることにしようというアドバイスが出され

た。その結果、子どもたちが遊びを主体的に選択する時間に、主に幼稚部内のどの場で活動しているかが視覚的にわかるようになった。また主任からは、新学期の生活が始まったばかりで子どもたちがまだ何をやりたいか見通しを持ちにくい段階だからこそ、担任がもう少し見通しをもって子どもたちが遊びやすい環境を作る努力をして欲しいとの発言が具体例^{viii}を入れながらあった。その後の園内研修では、担任からの自分のクラスの子どもの報告のみならず、自分が関わった他クラスの子どもの報告も出るようになった。

(2)の時期は主にそれぞれの保育者からの報告で終わっていたものが、ここでは話題に上がった子どもの担任だけではなく、関わった保育者が自分の捉えた「〇〇ちゃん」ということを積極的に話題として提供し「話し合い」が進んだ。その結果、それぞれの保育者によって子どもの捉えの側面が微妙に違うことも意識され始めた。

・話し合いの重要性への気づきと保育観のゆらぎ

10回(6/4)～13回(6/25)

園内研修は週日案の検討と子どもたちに関する話し合いを中心に行っていた。この時期、以前にも増して特別に配慮がいる子どもとして話題になったのがM夫である。着替えや靴の履き替えなど園での生活習慣の部分が大きくスムーズになってきた子どもたちが多く、担任はこのような場面がうまくこなせないM夫がどうしたら興味をもってこれらの活動に取り組めるか悩んでいると訴えた。また教育実習生として入っている学生からもM夫に対する関わりを試行錯誤していることが話された。

園内研修の議事録から、M夫の4～5月にかけての遊びをみると、にこにこ大人しく他の女の子たちと保育室前の遊動円木^{ix}に座ってゆられていることが多く、場所を移動しての遊びはほとんどなかったことがわかる。幼稚部の生活にまだ慣れていないことや、体の動きがぎこちないこと、視力も少し弱いことなどが重なったのことと思われる。それが6月に入った頃からかなり動きが出てきて、砂場や一人乗りの車等にも興味を持つようになり外遊びも多くなってきた。さらに保育室内での男の子を中心とした戦いごっこや隠れ家遊

び、それに女の子を中心としたままごとにも加わることがあり、一段と積極性を増しているようにも感じられた。ところが、この積極性と同時進行のかたちで出てきたのが、赤ちゃん返りかと思われるような行動である。床に転がって手足をじたばたさせながら泣いたりするのだが、だっこしてあげると嬉しそうに笑ったり、「いやだー!」を連発してテコでも動かなくなったりという行動である。これらのことは遊びの時間にはほとんど起こらない。起こるのは決まって着替えの場面であるとか、お弁当の片づけの場面であるというように時間の制約があり、おとなが干渉せざるを得ない場であった。入園するまではほとんど同年齢の子どもたちとは遊んだ体験もなく、いつも大人が目があり、干渉のある生活の中で過ごしてきたM夫にとって、大人に干渉されずに遊ぶ体験はほとんど初めてのことだったのではないかと。遊んでいるときの嬉しそうなお顔からそんなことが読みとれることが話し合われた。

担任のみでなく、M夫の着替え等の場面がかかわった保育者(実習生も含めて)は、その大変さを実感し、園内研修でM夫のことを話す担任の悩みを共感を持って聞くことが出来た。担任から「どうしても着替えとか片づけとかの場面だとして欲しいという保育者の思いが先行してしまう。そうなればなるほどM夫は頑なになり、テコでも動かなくなったり、こちらの様子を見ながら泣いてみたりということが起こってしまうということが他の保育者の話を聞くうちに分かってきた。こんどは少し余裕をもって、M夫が頑なにならないようにもっと柔らかく彼の考えていることが共有できるようにがんばってみたい」という話がなされた。

12回目(6/20)にはM夫のこのような行動に対して担任から「M夫本人の甘えたい気持ちが素直に表面にでてきているのだから、それをこちらが受け止めてあげたい。床に寝転がって手足をじたばたさせながら泣いたりするが、だっこしてあげると嬉しそうに笑う。そんなところを大切にしたい」という話があった。話し合うことでM夫への共通理解が少しだが生まれた。それが支えとなって、担任はM夫の嬉しい思いを実感できたともいえ、さ

らにそれが次の関わりを方向づけたといえる。

この時期、園内研修の話題として部長・次長が行っている月例の各クラスごとの父母との懇談会の報告、主任・担任を中心に連絡事項の確認、他園を見学したときの報告、保育参加ウィークx等の行事の内容の打ち合わせ等が出されるようになった。その週に全員で検討しておいた方がよいと判断された材料が積極的に出されるようになったのである。これは保育者の中に園内研修のような公式の場で話し合い、皆で共通認識を持つことが保育をする上で、何らかの意味を持つことが少しづつ浸透してきた結果ともいえる。また園内研修の日でなくても、その日に何らかの変化をしたり、気になった子どもたちについて、その子どもに関わった保育者が保育後に話し込むという光景が見られるようになり始めた。

・保育に対する内省のはじまり

14回 (7/2) ~ 17回 (7/19)

14回目、部長・次長から週日案が書かだけになっている現状の指摘があり、環境図の検討に続いて2度目の見直しを図ることとなった。週日案は1週間を終えての検証の部分が弱く、時に書かだけで終わっている現状も否定できないことが皆に確認され、週日案作成時に「先週の子どものとらえと反省」を文章化する努力をすることとなった。

また、幼稚部では伝統的に各学期の終わりに「あゆみ」^{xi}を出している。しかし部長・次長から今までのように評価的性格の強いものを親が読むことが、以後の子どもに育ちへの貢献になるのだろうかという疑問が出された。「あゆみ」は何のために書くのかという話し合いがなされ、子どもも親も保育者も「共に支え、つながり、育ちあう」ためには子どもの育ちを肯定的に捉えた成長記録のようなものに変えることのほうがよいという結論に達した。これらのことを通して担任たちは今まで自分たちが子どもたちに対してかなり評価的な態度をもって保育をしていたことを内省した。

・自分の保育の相対化と問題点の意識化

18回 (7/27) ~ 19回 (7/30)

7月19日に1学期の終業式を終え、続く23~24日には年長クラスのお泊まり保育を行って、1学

期の予定は全て終了した。そこで今学期を振り返る意味で、少し長めの時間を設定して、まとめの園内研修を行うことにした。日常の保育は終了しているので、自分たちの保育を少しでも客観視する良いチャンスでもある。そこで都内のある公立幼稚園の2年間の保育をVTR編集したもの^{xii}を全員で視聴して自分の保育を振り返るということを研修内容として取り上げた。視聴後一人ひとりが自分の保育と照らして感想を述べた。「VTRの園では保育に対する年間の見通しがある。これがあると保育者にも余裕ができる。」「この園ではこんな子どもに育てたいというような子ども観を持っていること、そして子どもとの信頼関係がしっかりあるということがわかった。」というようなことが挙げられた。そして現時点での自分達の保育にはそこが欠けているのではないかと話し合われた。

VTRから学んだことと、1学期の積み重ねを合わせて、2学期半ばに行われる学園祭「みどり祭」を良いチャンスととらえて、どう取り組むかという具体的な内容を詰めていこうという提案が主任からあった。「子ども、親、保育者がみんな参加し、子どもが達成感を持てるものにしていきたい。」「子どもたちをどう育てていくかを考えながら11月までの見通しを立てていきたい。」「保育者個人でやるのではなく、みんなでこうしようと考えてやっていきたい。」「行事だけがぼっこりと浮いてしまうのではなく、日常の保育の中にどう位置づけて準備をしていくかを考えなくてはならない。」等、今までの反省を踏まえて、今回こそは見通しをもって取り組んでいきたいという意気込みのある意見が担任を中心に多く出された。

また今までの反省としては、「今まで以上に子どもたちの様子や状態を確認し合う必要がある」「子どもたちの幼稚部での生活の生き生きしている様子を親に伝えていく努力をする」「今までは話し合っているようでも細かいところまでは話し合っていなかったので、みんなで少しずつズレていた。話し合ったつもりだったので、そのズレが肝心の場ではっきりしてバタバタしてしまうということを繰り返してきたように思う。今回こそは何とかそこ

を乗り越えて話し合っていきたい」等が話された。この話し合いで、これまでも話し合いを続けてきたが、それでもなお思いこみやズレがあることが確認された。

心に思うだけではなく、皆の前で口に出してみることの大切さ、どうしてこうなってしまったのだろうという後ろ向きの反省ではなく、保育に見通しを持って取り組んでいく姿勢が全員のなかに浸透しはじめた。

1学期最後の19回(7/30)にはみどり祭の幼稚部でのテーマを決め、これを機に異年齢の子どもたちが関係を深めるように保育を進めていくという方向が主任・担任を中心に示された。さらに2学期早々に行われる敬老の日や運動会のような行事、誕生会などについても再考の余地があることが話し合われ、そのための具体案を夏休み中に考えることが課題となった。

(4) 第3期(9/3~10/15)

・内省の深化と保育を揺さぶられる体験

20回(9/3)~25回(9/25)

2学期初めの園内研修で、部長から一日の保育の省察をするために週日案のみではなく、一日が終わった時点でその日、自分が一番印象に残ったことをエピソードの形で書きあい、週ごとにまとめて皆が閲覧できるように保存するという提案があった。また担任からは新学期が始まって、今までとは違う各クラスの子どもたちの様子が報告された。子どもたちは思ったより早くペースを取り戻して園生活になじみ、遊び始めているので、遊びの内容を充実させるための準備が必要であることが話し合われた。先学期たびたび話題になったM夫に関しては、気持ちの上では好奇心がいっぱいでいろいろと動きたいと思っているようだが、それに体の動きがつかない様子が担任から話された。そこで、そのフォローをしつつ、M夫の気持ちが叶うように援助していく方向でやっていくことになった。

一方、新しく話し合いの中心になったのがY夫である。Y夫^{xiii}は4月当初かなり動きが激しく、保育室に皆が集まっているときも自分の遊びを園庭で続けていることが多かったが、幼稚部が遊んで

良い場所だとわかると、日一日と落ち着きを取り戻した子どもである。多少羽目を外すことはあるものの、Y夫自身は園生活を楽しんでいるように見受けられたので、園内研修で頻繁に話題となるということはなかった。しかし2学期早々、母親が気持ちの上で不安定になったことと平行してY夫の様子が何かおかしいということが担任のみでなく、複数の保育者から出された。「おうち帰るー」「幼稚園やめるー」「〇〇先生なんて大っきらい!」「Y夫が幼稚園やめたら寂しい?」「Y夫が死んだら先生どうする?」こんな言葉が連発されるようになったのである。園内研修でも保育後記録「一日を振り返って」のエピソードでもY夫に関するものが増えた。23回(9/17)には担任からY夫があまりにも「Y夫が幼稚園やめたら寂しい?」ということを連発するので、もう突き放してもいい時期かもしれないという発言がなされた。その発言を巡って、様々な意見がかわされた。そして「4歳児という年齢で子どもを突き放して、こちらの気持ちを分かってもらえるということはまずないこと。信頼関係を築くことの大切さをもう一度見直す。」ということのひとつの共通理解としてM夫と関わっていくことが確認された。

このことがあってから今まで以上に保育の細かい一つ一つの場面を検証して、それぞれの保育者の様々な思いを話し、その微妙なズレを互いに認識しておくこととなり、園内研修もその内容と密度において第二段階に入ったことがメンバーにも実感された。

・自己の吐露と保育の再考

26回(10/1)

9月29日に幼稚部・初等部との合同運動会が行われた。その後の反省会で運動会前1週間はY夫、M夫、G子、Z子など、特別に配慮を必要とする子どもたちが目立った週になってしまったことが全員から出された。次長から運動会の練習が、大きい集団とそれからはみ出た個という構造を作ってしまう、大きい集団に属する方も集団に呼び込む働きかけしかせず、さらにそれでも参加しない場合、子どもたちの中に「〇〇ちゃんは一緒に来ない子、困った子」という「はみ出る子どもたち

を作る構造」になってしまったという意見が出された。これはこのままにはほっておけない。この問題を取り上げることが保育の見直しの良いチャンスになるかもしれないということで26回（10/1）の園内研修につなげることになった。ここでは、こういう状況を作ってしまった根本を考えるとという意味で、それぞれの保育者が自分の園での役割をどう考えているかを話し合った。担任を持つ保育者からは「誰がまとめるのか、決定するのは誰なのか」が明確ではなかったことで共通理解がなかった。「今まではいつも前年と同じことをやっていた。自分で変えようという気もなく、自分のなかにアイデアもない。考える力も乏しかったのだと実感した。今はこれまで保育観を作ってこなかった自分に気づいた。今、すぐには変えられないけれど、変えようとしている自分が今はいる。」「何をどうすれば良いか分からないのに、他の保育者に聞くことも出来ずに過ごしていた。自分の保育に対する不安や心配がいっぱいあるのに言えなかった。しかし今年の研修で自分の足りないところが少しはわかった」「何となく保育者になった。小学校教師を目指していたので幼稚園とはどんなところか勉強もせずに来た。毎日を取りあえずクリアしなければという気持ちだけで過ごしてきてしまった。」と、主として自分の今までの幼稚園教諭としての歩み、そして悩みが吐露された。このようなことが語られた後、他園を経験しているフリーの保育者から「フリーの保育者は担任と願いが一緒ではないとダメな部分がある。特に特別に配慮を必要とする子どもたちに対してはそこがポイントになることも多い。」「今日の保育に関してはどうして10時半になったときに他の遊びを中断して片づけになったのか。今日の子どもたちを見ると、運動会の練習が終わったためかクラスのあちこちで思い思いの遊びが展開されていた。それでもその時間に片づけにすることの意味を考える必要があるのではないか」という意見が出された。「過去の振り返り」とまさに「今日の保育の振り返り」の問題が同時に出されるのである。そしてこういう時にこそ再度一日の保育の流れを子どもたちの様子を見ながら再考する必要があるという意見

が出された。他のメンバーもそれに賛同し、明日からこれらに留意し、保育を行ってみることになった。

・混乱、試行錯誤から柔軟な一日の流れを再構築
27回（10/10）～28回（10/15）

26回（10/1）後の保育の変化はドラスティックであった。週半ばから今まで殆どクラスごとに室内で食べるが多かったお弁当を園庭、テラス、保育室の中と色々な場所で、しかも特に3歳児と4歳児がクラスを越えて混ざり合って食べるようになった。同時に一日が子どもの遊びや生活の流れに沿って進むようになった。時には行き過ぎやすれ違いを体験しながら、保育者たちが保育の枠に囚われず、恐れずに試行錯誤を始めた。日によっては「混乱の一日」になってしまうこともあったが、そういう日は保育後、あちこちで保育者が話し合っている姿がみられた。保育の上でのずれや違いをなんとか話し合いにのせたいという思いがあつてのことと思われる。またこの時期、保育室には今までになく、さまざまな素材や材料が子どもの手の届くところに用意されるなど、環境面の変化も顕著であった。

一方、Y夫に関してはそれぞれの保育者が自分のスタンスでかかわり、それを丁寧に話し合いながら保育を進めた結果、27回（10/10）、28回（10/15）にはY夫の「幼稚園やめる」や「〇〇先生なんか大っ嫌い」という発言がY夫の混乱した気持ちを表す重いものではなく、決まり文句のような軽い意味合いに変化してきていることが話し合われた。またあちこちでさまざまな遊びが展開する中、Y夫が目立ったり浮いたり、攻撃的になっている場面だけではなく、ごっこ遊びの一員となったり、他の子どもたちとも一緒に遊びたいという意志がかなりあることが担任のみならず他のメンバーからも話された。この時期保育の枠組みが柔軟性を持つようになったことと呼応するかのように、Y夫だけでなく、3歳からずっとおとなしかったK子が弟が生まれたことで、ずっと自分を押し殺してきたことを大泣きという形で訴えたり、昔から集団の中で固定的な役割を行っていたB夫が、自分の意志を通して自ら新しい集団に加わるといったように、あちこちで子どもたちが自分や自分

の本音を出している姿が報告された。障害を持っている子どもだけが特別に配慮を必要とする子どもたちではなく、自分の思いを真剣に出してくるときには、どの子にも「特別に配慮が必要である」ことも話し合いの中から浮かび上がり、丁寧にかかわることの大切さが話し合われた。

「一日を振り返って」のエピソードにも子どもたちに関するエピソードだけではなく、保育者自身の保育に対する内省が書かれたものが多く出されるようになった。「26回(10/1)の話し合いで自分のことが少し整理され、かなりすっきりした気持ちで保育に臨むようになったら子どもの姿がよく見えるようになった」「子どもたちがなんとか楽しくなる方向に援助をしようと努力してそれが報われたとき、これが保育の醍醐味かと思った」等である。

保育の一日の流れも、4月当初の固定されたものから、子どもの状態や遊びの姿、それに保育者の思いなどによっても変更が可能である柔軟なものへと変化しはじめた(図2参照)。

図2 2001年10月15日時点の一日の保育の流れ

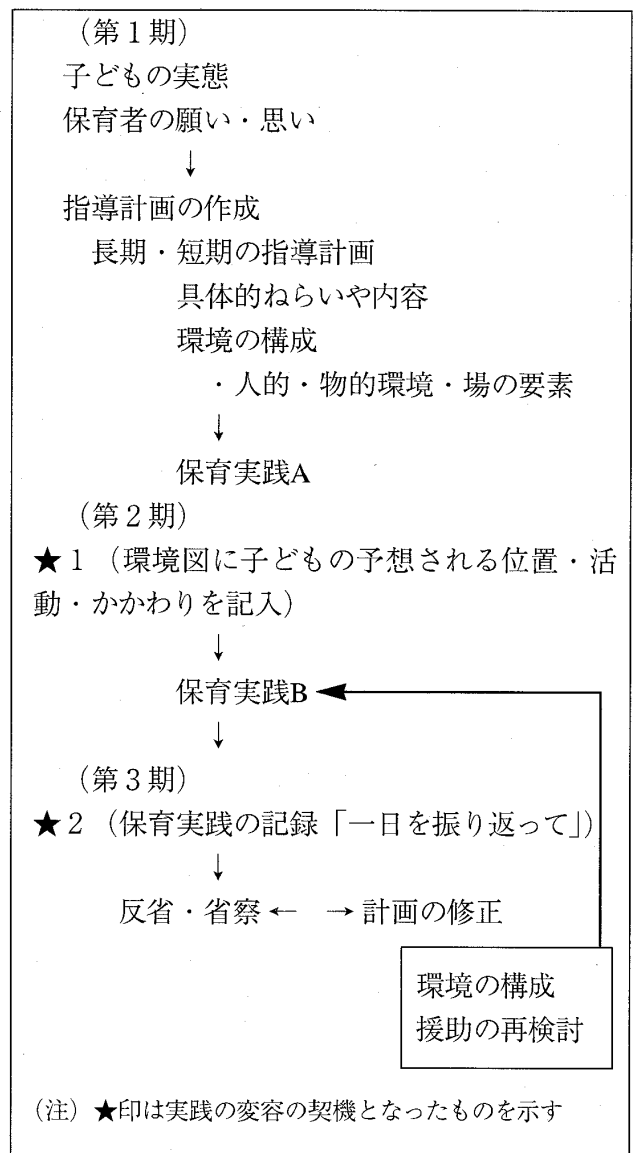
1日の流れ	
8:50	登園
登園後、着替えを済ませたら、自分で選んだ遊びを始める。保育者は指導計画や前日の子どもの姿を考えながら、環境を準備しておく。クラスので単独の活動というより、異年齢で交わった活動が展開していく。指導計画に従って、設定保育を入れることもある。また保育者が行いたい活動がこの時間に平行して行われる。	
11:00過ぎ	片付け
使ったものを協力してじっくり時間をかけて片付ける。	
11:30頃	お弁当
その後、自由に遊ぶ	
12:50頃	片付け
13:10頃	着替え
図書の出借(週2回)	
13:45頃	帰りの会
14:00	降園

4.まとめと考察

今回園内研修での特別に配慮を必要とする子どもへの注目が契機となって具体的な子どもの姿や保育者の子どもへの関わりがより鮮明に浮かび上がってきた。それは「配慮」という保育者の「意識」のあり様が子どもや自分自身の「位置」を明確にさせたともいえる。この切り口から始まった園内研修であったが、その構造は3期に別れていることがわかった。

園内研修の初期段階(6ヶ月間)の保育実践の過程を構造的に表すと(図3)のとおりになる。

(図3) 現段階の園内研修を土台とした保育実践の過程



(2001年10月15日現在)

(第1期)

初めに子どもの実態と保育者の願い・思いがあり、それをもとに指導計画を作成した。指導計画は短期と長期のものを作成したがいずれも具体的なねらいと内容および環境の構成を含んだものである。環境の構成のなかには人的・物的環境と場の要素を入れた。この時期はこの段階で保育実践(図3の保育実践Aにあたる)を行い、実践後の計画の見直しや省察に重きを置くことができないまま実践が繰り返され、その結果として保育者実践に大きな変容はみられなかった。

(第2期)

保育の計画が計画に終わってしまう危惧が生じたため指導計画に環境図を置き、そこに子どもの予想される位置・活動・関わりを入れることを試みた。このことで子どもの姿をより具体的に浮かび上がらせることができると考えたからである。これを踏まえて保育実践(図3の保育実践Bにあたる)を行ってみると、保育者の子ども理解の深まりが見いだされ、自分の関わり方がどのようなものであるかの内省が始まった。

(第3期)

保育実践後に保育後記録「1日を返って」を書くことが提案され、実践に反省と省察を加えることになった。今までは計画に重きが置かれ、省察の深まりがもう一步であったからである。このことを契機として省察内容に子どものエピソードのみではなく、保育者の自己および人格の吐露が加わり、省察や内省が深化した。これと平行して環境の再構成と援助の再検討を含んだ計画の修正がより具体的に行われるようになり保育実践の枠にも柔軟性が加わった。計画→保育実践→省察→計画の修正→保育実践が連続して機能しはじめたのである。

以上のことから今回の園内研修を通じて保育実践の変容の転回点となったのが子どもの位置・活動・関わりがわかる環境図を指導計画立案の際に作成するようになったこと、そして保育実践の保育後記録「1日を振り返って」を書き始めたことであることが明らかになった。

5. 今後の課題

園内研修で生まれた保育者の力動性が子どもたちにどうかかわっていくのか、その相互関係の検討は未だ十分でない。また保育者が子ども理解の深まりとともに「見る人(観察者)」の視点の面白さを獲得したことで、子どもと共に動く実践者としての動きにかげりが見える場面も指摘できる。実践しつづめることの難しさが生まれてきている。今後はこのような問題も踏まえて、園内研修を土台とした保育実践の過程の構造をより明らかにしていきたいと考えている。

○引用・参考文献および脚注

- i 田中三保子他「保育カンファレンスの検討」保育学研究第34巻第1号1996p.29-42 2000年
- ii 田中三保子他「連携を軸に保育の要点を探る」日本保育学会第53回大会研究論文集 p.324-325 2000年
- iii 長山篤子他「園内研修(1) —園内研修と保育の関わり—」日本保育学会第53回大会研究論文集p.318-319 2000年
- iv 岸井慶子他「園内研修をめぐって(その2) —ビデオ観察を通じた共同研究について—」日本保育学会第53回大会研究論文集p.160-161 2000年
- v 青木久子「保育の閉塞状況を開く試み—混沌に潜む対話への芽—」日本保育学会第53回研究論文集p.124-125 2000年
- vi 青木久子「保育の閉塞状況を開く試み—学習内容はどこに生まれるか—」日本保育学会第54回大会研究論文集p.268-269
- vii ここでいう環境図とは週日案に作成した保育室内と園庭の図に準備した環境を図示したもの
- viii 保育室から出やすい雰囲気を作るために園庭にシートを敷く等
- ix ブランコの一種。一本の木に数カ所区切りがあり、そこに子どもたちが数人一緒に乗って漕いで遊ぶことができる。
- x 今年度から始めた父母に対する公開保育週間のことを指す。

xi 昨年度までは評価的性格の強いもの（通知簿的なもの）であった。

xii 目黒区立ひがしやま幼稚園

xiii 3歳児のときはほとんど遊びの時間のない幼稚園に在園していた。しかしそこには合わないと親が判断して4歳児のときに本園に転園してきた。

○参考文献

1. 大戸美也子・横浜学園附属元町幼稚園「保育の見直し・1000日の実践記録」フレーベル館 1984年
2. 吉村真理子・菅田英子「園内研修と保育者の成長—松山東雲短期大学附属幼稚園の場合」雑誌「発達」p112-121 ミネルヴァ書房 1993年

要旨

園内研修初期段階において特別に配慮を必要とする子どもへの注目が具体的な子どもの姿や保育者の子どもへの関わりの姿をより鮮明に浮かび上がらせる契機となった。保育実践変容の要因として、次の3点が明らかになった。

- 1) 指導計画の環境図に子どもの姿を書き入れることで子ども理解が深まり、自分（保育者）が子どもとどのように関わっているのかが客観化された。
- 2) 子どもに対する配慮の違いを通じて保育者の持っている暗黙の保育観・子ども観に違いがあることが確認された。
- 3) 「保育後記録」を書き、保育の省察を行うことが、保育実践の変容を導き出す原動力となった。

(2001.10.31 受稿)